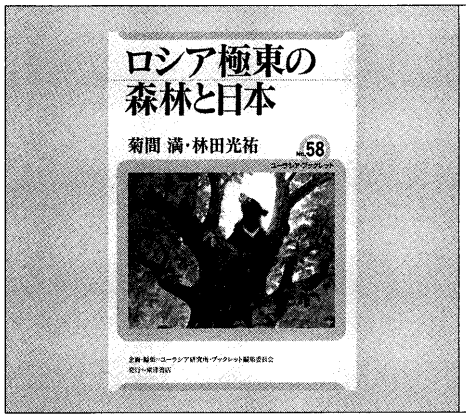
The Association for Northeast Asia Ragional Studies



会員著書紹介（2）

菊間　満・林田光祐 著
『ロシア極東の森林と日本』
2004年2月（東洋書店）

紹介者：多　賀　秀　敏（早稲田大学）

環境研究は本学会の重要な主題である。環境研究の対象や課題の個別設定は可能だが、環境問題は複雑に連関する包括的社会性をもつ。本書の主題は森林管理と生物多様性の維持であり、ロシア極東の森林調査を踏まえ、日ロ共通の森林問題に対する見方と考え方の提示を目的としている。サハリン、北海道、東北地方とロシア沿海州を中心に針広混交林が存在する。ロシアではチョウセンゴヨウが多く、日本ではササ類が表土を覆う。それ以外はほぼ同じだという。しかも、当地域間の貿易は日本の木材輸入が主である。沿海州の混交林とはシホテ-アリン山脈地域の森林である。著者は、面積ほぼ2000万ha弱、林木蓄積30億m^3と推定した。日本全体が、それぞれ2500万ha、31億m^3である。広大さがわかろう。ここが、森林乱開発、動植物の乱獲、観光開発の危険にさらされている。日本の合板の北洋材転換、韓国、中国の輸入増加のため伐採地の奥地化も進んだ。

対策は「先住民などの伝統的な森林利用の分析を基礎に」「科学的な森林施業技術に高める」のが自然への「負荷の少ない、最も無理のない方法」だと著者はいう。森の伝統を象徴する民話も登場する。ネズミが貯えた樹皮、樹根を採る時「ネズミさん、あなたと物々交換にきました」とパンをおいていく。「もし水があろうとも、そこに一匹の魚もいないなら、私は水を信じない。たとえ空気の中に酸素があるにせよ、そこにツバメが飛んでいないのなら、私は空気を信じない。そして、獣たちのいない森は、もう森ではない」。

官僚による森林管理の限界は日ロ共通の課題である。「ボトム・アップ方式の森林管理には、地方自治体による分権的な森林管理と住民自治が何より必要」とし、生物多様性原則が尊重される管理には「伝統的な森林利用とその担い手、担い手から構成されるコミュニティは不可欠の条件」とした。日本では縦割り行政も加わる。自然や資源は一体で有機的連結性を有する。一体に扱うことで合理的管理が可能とし「共和国・地方のもつ天然資源委員会方式のロシアの森林管理はそれが地方自治の理念に則り、総合的に地域性を生かし、機能するならば」日本でも検討すべきだと述べる。アヌーチノの自然保護運動の前進はペレストロイカの一環で「森林、林業部面での民主化運動の一環で」あるとの指摘は重要である。たとえば、マツクイムシの被害は、対策予算に応じて増減する。「森林破壊や自然破壊は、ほとんどが自然現象ではなくて、社会現象である」。その再認識は、日ロに共通した課題だからである。

著者は、データの公開、交換から始めよと指摘する。具体的提言も多い。ケースを増やし各国語に訳し、本書をこの地域の森林共同研究への第一歩としてはどうだろう。なお、菊間会員は、ロシア・韓国などの森林調査に活躍するとともに、本書にも引用されるM・ディメノーク『どんぐりの雨』（北海道大学図書刊行会、1997年）の共訳者でもある。併読をお勧めしたい。

NII-Electronic Library Service